

隨筆エッセイ

奨励賞

【自由作品】

惜愛の今江潟

安達 茂治

「明日の十四時に小松へ向かう便が出る。それに乗れ。忘れ物をするなよ！」上司から無情の伝達があった。時、昭和四十一年（一九六五）中秋の頃、所は埼玉県中央部に位置する空自入間基地でのことだった。

ちょうど空自内部の組織換えをする時期に当つていて、私が属していた部隊は近日に解散する運命にあつた。隊員個人については否応なく転属となり、全国數か所の基地にほとんど強制的に移動をさせられた。

「おまえは小松だ！」それが私への申し渡しであつた。北陸・石川県の小松。当時のイメージとしては、『大変な田舎で、晴

天の日は殆んどなく、雪のよく降る極寒の地』。夢多き若者であつた私にとつてはお先真暗だつたが、「あとは天任せ。そのうち何となるだろう」とあきらめてその日を待つていた。

当日、プロペラ付きの輸送機から、雪を半分頂いた富士山を眺めてすぐ、機体は大きく右旋回して日本海方向をめざした。

小松上空に達したあたりで、しばらく空中待機をさせられた。その時、下界に三か所大きな水溜りが見えた。「水害でもあつたのかな」と不思議に思いながら眺めたのが、加賀三湖との初の出会いであつた。

一つはあまり大きくない長方形、二つ目は変形した三角形でやや大きい。残る一つは複雑怪奇な形でかなり大きい。後日、それらは水害の跡ではなく湖の集合体と分つた。海が土砂にせき止められて出来た海跡湖だつた。

上空から眺めた貝殻の形のような湖は小松基地の敷地のすぐ前にあつて、正門前から全景を展望できた。長さ一〇七三メートル一、三〇九メートル、周囲八キロメートル、面積二、三一平方キロメートルを「今江潟」と言つた。

現在の形になるまでに二千年ほどの歳月を要したと伝えられている。

特に今江潟は安宅の海岸や山地から流れれる梯川とも連なつており、海水と淡水の混ざった水質。他の二つの潟の排水の中継役も果しており、物資の輸送にも活用されていた。

潟の東側には靈峰白山が厳然とそびえ立ち山姿も実に整然として、三湖のどの眺めよりも一段と冴え渡つていた。

やがて着任後初の冬を迎えて、全山雪化粧に輝く白山を初めて眺めた。まず「何という絶景か」と大いに感動した。雪を頂く白山、今江や向本折の民家の屋根、湖水に浮かぶ小舟などの取り合わせは、一幅の山水画を眺める心地であつた。片津温泉の湯を小松市内の銭湯に運ぶ蒸気船まで走つて、それらに色を添えていた。四季折々の景観が常に感動を与えてくれた。自分としては、すばらしい所に勤務できることを大いに喜んだ。

それから四年ほどたつた昭和四十四年（一九六九）、今江潟と柴山潟の一部は干

拓されることになり、水を抜く工事が始まつた。海拔ゼロメートルの湿地であるために、周辺民家への水害も多発して、三湖の排水の改良がすでに10年前から計画されていた。

今江潟は昭和四十四年十月から翌年三月

まで、連日排水ポンプを作動させ、事前に完成させていた人工の堤の外に排水し、一日二センチ平均で水位を下げて行つた。水位の減少につれ、淡水魚、海水魚の入り混つたおびただしい量の魚が柴山潟方向に逃げまどい、周辺の人たちが連日にわか漁師となつて漁獲に奔走し、大いに賑わつたといふ。

干拓完了後は石川県の立案により生産性、所得水準の高い経営で、完全な自立のできる近代農家となり得る農家を厳選して、入植、増反者が選定された。

お陰で工事修了から五十五年を経た今日でも青々とした早苗や、黄金色に波打つ稲穂が四季折々、目を楽しませている。潟を南北と東西に貫く一本の主要道も整備され、それらを通行する車両も連日賑わつてゐる。

これらの現状を見るにつけ、今後少しつつ市街化としての構想が話題に上ることになりはしないだろうか。規制を緩め、転売を容易にすれば好ましくない方向に開発されることになりはしないか、と心配になつてくる。

ネオンサインが輝き、カラオケの音声や嬌声の飛び交う場所には絶対に変えないでほしいと切に願うところである。外国資本の手に渡るなどもまた然り。今のまま稲穂がたなびく姿、前川の桜土手から満水だった頃の今江潟の姿を思い浮かべられる現状、これこそが誕生以来二千年余の今江潟の歴史に報いる唯一の方策、と考える次第である。

あゝ尚も奈つかし 詩人たちの今江潟
四季の今江潟の情景を

もつと深く見ておけば良かつた……
とは当地を代表する作家森山啓の弁。
全く同感。